「データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する　その一

草　薙　太　郎

１．はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い，富山大学人文学部の研究室に１９９０年頃から収集し，随時オンラインのデーターベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから，米国の文化的特徴が読み取れる。それを「『データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一」[1]「その二」[2] としてまとめた。

その成果からシェイクスピア＝ベーコン説の検証が出来ることを示してみたい。米国のシェイクスピア研究は決してシェイクスピア＝ベーコン説を支持するわけではないにせよ，万が一シェイクスピア＝ベーコン説が動かしがたい証拠によって証明されたら，イギリスや日本の研究者は衝撃を受けるであろう。しかしアメリカの研究者は「それもありうること」と平然としているのではなかろうか。その理由を明らかに出来るのが，まさに「データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文」なのである。

シェイクスピア＝ベーコン説を否定する通説の根拠は，意外にコンピュータで証明したり，厳密な体系的理論による「いわゆる自然科学的」なものではない。そうではないけれど，かなり確固たる基盤を持つ「人文科学的感覚」の上に成立した，「文体論」に基づくといっていいと思う。

「人文科学的感覚」とは，いわゆる学術の名が冠せられる学会，大学といったところの文学部や人文学部，それらを基礎とする大学院の研究科で醸成されるのが主であるものの，意外にジャーナリズムも含まれる。

そのことを分り易く認識させてくれたのは，考古学の大発見を続けていた考古学者の一人が全くのインチキをやっていたことを新聞記者が発見したことである。このインチキ考古学者は自分のコレクションを早朝密かに発掘現場に埋めては「発見」と称していた。

1　富山大学人文学部紀要第40号（2004）.
2　富山大学人文学部紀要第42号（2005）.

興味深いことに，このインチキは，専門の考古学会では発見しにくいものであった。互いの詮索を嫌う体質が問題だともいわれる。しかし，それは人間関係としての隠蔽体質だけが問題ではない。先頃創設された科学技術論学会の学会誌には，この問題を厳密に検証すればするほど事件を防ぐことの困難さが浮き彫りになることを指摘した事例研究としての考察[3]がある。この考察が掲載された同じ雑誌には同じ著者による社会学的考察[4]もあって，捏造石器を専門家が見破るのは困難であることが考察されている。

見破ったのは考古学の専門家ではなく新聞記者であった。新聞記者は考古学の素人かもしれないけれど，「人文科学的感覚」を広く考えてジャーナリズムを含めれば，その方面の専門家といえる。インチキ考古学者を取材しているうちに，おかしいと直感し，早朝の現場に張り込んで「犯行」を押さえた。

もし先述したように「通説の根拠はインチキ考古学者を見破った新聞記者感覚」だとしたら，シェイクスピア＝ベーコン説と，それを否定する通説とは，どこか攻守ところを替える趣き(考古学の事件では学会の権威をジャーナリストが叩いたのに，シェイクスピア＝ベーコン説については，それを否定する通説の方がジャーナリスト的だというのだから）が感じられるかもしれない。実際，シェイクスピア＝ベーコン説に限らず，アンティ・ストラトフォーディアン・セオリー（反ストラトフォード出身者理論。シェイクスピア＝フランシス・ベーコン説も，シェイクスピア＝エドワード・ヴィア説も，ストラトフォード・アポン・エイヴォンという町に生れ，ロンドンに出て演劇人として成功した，あのシェイクスピアが一連の作品の真の作者ではないという意味で，まとめてこう呼ばれる）の方が余程「いわゆるアカデミック」な論証の仕方をする。テキストの異同を論じ，様々な新資料を提出し，時代背景を論じ，当時の文化サロンにまで言及して理論を構築する。これに対し，通説の根拠は極めてナイーヴな「シェイクスピアの伝記」に基づく「感想」のようなもので，「何となくやはりシェイクスピアは存在したし，ストラトフォード出身の人だと思う」といったもので，その「シェイクスピアの伝記」自体，シェーンボーンのような厳密な資料の検討を行うと，かなりの部分に「確定ではない」という留保がついてしまうものである。

しかし，それにも関わらず，こちらの方が通説で，しかも，なかなか強力なのである。

シェイクスピア＝ベーコン説を支持する人々の多くは「シェイクスピアのセリフに人生の機微をえぐった哲学的セリフが多くちりばめられていること」を挙げる[5]。

3　山内保典，岡田猛，「妥当性境界の形成過程に関する研究――考古学における事例研究」，科学技術論研究２「知の責任」,(2003.10).

4　山内保典,岡田猛，「妥当性境界形成の力学――社会学的要因の観点から」,科学技術論研究２「知の責任」,(2003.10).

5　梅原猛,「反時代的密語」,(２００５年３月２９日付け朝日新聞の文化欄コラム).

問題は「哲学的なセリフ」である。

二人が同時代を生きたことは当然シェイクスピア＝ベーコン説を補強する。しかし，「哲学的なセリフ」の方は，何とでも解釈できる面がある。シェイクスピアの「人生の機微をえぐった哲学的セリフ」については四百年のシェイクスピア学の積み上げがあって，モンテーニュとの類似も指摘されるし，キリスト教の各派の考え方から様々な形の聖書と関連する文献，シェイクスピア（もしくはベーコン）が目を通した可能性のある，ありとあらゆる「哲学的セリフの種になりうる」文章が検討されている。その結果，シェイクスピアの作品について，特にベーコンの影響が大だという結論には至っていない。

「人生の機微をえぐった哲学的セリフ」を問題にすると，それはシェイクスピア＝ベーコン説が絶えない理由になると同時に，通説がシェイクスピア＝ベーコン説を一蹴する理由にもなるのである。

端的な例として，ハムレットの「生か死か（このままでいるか，いないか），それが問題だ」で始まる有名な独白がモンテーニュとベーコンと，どちらと関わりが深いかを論じれば，この点は明らかになると思う。

それを述べる前に，まずこれら米国シェイクスピア研究学位論文を，基になったデーターベースと同じく，米国の（1）移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴（2）そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴（3）競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする（フェミニズムが典型）圧力のある特徴を表すものに，三分類する。このことで，逆に分類項目として挙げた米国の特徴が浮かび上がると考える。そこにシェイクスピア＝ベーコン説との関わりを述べてゆきたい。

なお本稿ではデーターベース項目のうち（1）移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴の，さらに細分した(a) 心理学，臨床心理学などと関連するもの(b) 枠にとらわれない米国流自由研究に対応する部分のみ掲載する。

さらに本稿は，そのまま学術論文の形式によるデーターベースとしての役割も付すため，脚注の論文名の後に富山大学図書館請求番号を付け加えた。

２．米国が移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

ボーダーレス化とシェイクスピア＝ベーコン説検証とは深い関わりがある。石器捏造問題が起きたとき，「時代が時代だから」という声が考古学，日本史関係者から聞かれた。つまり，同じ考古学や日本史でも，時代がもう少し新しければ，ちょっとした石器の発見が歴史を書き換えるような事態は起こらないということである。つまり「いくら何でも常識で考えて・・・」

という発言が出来て，しかもその「常識」が学者のコミュニティーだけで通用する常識ではないのである。例えば鎌倉時代以降なら素人の間でも日本の国という国家観と歴史観がぼんやり出来上がっている。「質実剛健の武士」「優雅にのほほんと暮らす公家」という構図は素人の間でも確固としている。いくら鎌倉時代の鎌倉で出土した食器の方が同時期に京都から出土したものより贅沢であっても，そのことだけで突然公家と武士のイメージが入れ替わりはしない。どんなに権威ある考古学者が実証し，力説し，専門家のコミュニティーを説き伏せても，なお自説を通説とするには，日本国民全体を相手に，さらに努力をする必要がある。

この国家観，歴史観は，しかし外国人には通用しない。映画「ラスト・サムライ」で明らかなように，かなりの知日派でも，アメリカ人は公家と武士を区別しない。両方をひっくるめて「貴族」と言う。あるいは公家や天皇まで「サムライ」にしてしまう。この感覚なら，鎌倉で出土した食器の方が同時期に京都から出土したものより贅沢であるなら「鎌倉の貴族は京都の貴族より贅沢」と理解して終わってしまう。「質実剛健」という武士のイメージが壊れたとも思わない。

同じことがシェイクスピア＝ベーコン説についても言える。イギリスでは英文学の古典の作者としてのシェイクスピアと，近代哲学の祖としてのベーコンのイメージは，かなり確定している。ある程度伝記が分かっていて，その著作の評価が定まった二人は，それだけで歴史の中で確固とした存在であり，二人とも常人には及ばない精力的な人生を送ったことから見ても，二人が同一人物であることは考えられない。しかし，それはいわば公家と武士を区別する旧世界の感覚である。

旧世界の感覚とはボーダーレス化が始まる前の国家秩序があった世界の感覚である。アメリカはそうした国家秩序を排し，科学技術を尊重しながら，世界のボーダーレス化を推進し，ボーダーレス化の中心勢力としての自己を伸ばした。旧世界の国の一つとして国力を伸ばしたわけではない。その価値観は徹底した実証主義と，プラグマティズム，トランセンデンタリズムといった特徴を持つ信念に支えられている。

実証主義といえば，先にも触れた，二十世紀で最も尊重されるシェイクスピアの伝記の一つにシェーンボーンの『ウィリアム・シェイクスピア：実証された伝記』[6] がある。これはシェイクスピアにまつわる伝説と史実との境界を，実証できる資料に基いて決めようとしたものである。そこで浮かび上がるのはストラトフォードの田舎からロンドンに出て多少は成功したらしい演劇好きの男性の一生であって，英文学の古典の作者として確立したイメージとは違う。イギリスや日本の旧世界的価値観を持つ読者は，すぐにこの伝記の実証の上に英文学古典の作者として偉大なシェイクスピア像を重ねて読む。けれど重ねて読まない読み方も出来る。そう

6　Schoenbaum, Samuel., *William Shakespeare: A Documentary Life,* (Oxford:1975).

思うと，アメリカ的価値観を押し付けない見識があって，しかし旧世界的な偏見からも解放されている「すぐれた」著書だと気付く。

この著書に偉大なシェイクスピア像を重ねて読まなければ，たとえばベーコンが演劇の着想を創作し，筋書きと，ちりばめるべき哲学的セリフを指定した上で，この男性に脚本を書かせ，すべてに目を通して上演させたという，事実上のシェイクスピア＝ベーコン説も成立しないわけでもないように思える。そういう感覚を生じさせるのは，英文学古典の作者として偉大なシェイクスピア像を支える，旧世界的秩序の崩壊である。ボーダーレス感覚とシェイクスピア＝ベーコン説は密接に関係する。

シェイクスピア＝ベーコン説を一笑に付することができるのは旧世界的国家秩序を確かなものとする感覚による。その確かさがゆらぐとき，シェイクスピア＝ベーコン説は，支持はできないまでも検討に値する仮説になる。

データーベース同様，この項目はさらに細分して(a) 心理学，臨床心理学などと関連するもの (b) 枠にとらわれない米国流自由研究 (c) 映画に関連するもの (d) 多民族国家，植民地政策などに関わるもの (e) 語学的考察に近いもの (f) 実際に演じることからの論考 (g) ホモセクシュアルに関わるものに分け考察してゆきたい。本稿では，そのうち(a) (b)のみについてとし，「その一」としたい。

(a) 心理学，臨床心理学などと関連するもの

ボーダーレス化の特徴は米国シェイクスピア研究博士論文の「学際的」考察にあらわれる。レトリックを心理学と言語学の結合として，シェイクスピアなどを分析するもの[7]がある。ブリューゲルの『イカルスの墜落』を扉に掲げ，臨床心理学的読みで，『尺には尺を』を捉えたり，デカルトやセルバンテスなどを例に，哲学と心理学の間を彷徨う論考[8]がある。これなどは西ヨーロッパの文化的伝統の特徴も併せ持つ。

ボーダーレス化しなければ，「英文学」「英国の近代哲学」という一国の研究領域をしっかり認めるだけでシェイクスピア＝ベーコン説は払拭できる。そのことを，先述のハムレットの「生か死か（このままでいるか，いないか），それが問題だ」で始まる有名な独白がモンテーニュとベーコンと，どちらと関わりが深いかを論じることで説明したい。

ハムレットの「生か死か（このままでいるか，いないか），それが問題だ」で始まる有名な

7　Czerniecki, Krystian Mare, *The rhetoric of melancholy : Shakespeare, Racine, Kleist,* (1991). 富山大学図書館請求番号902.2||C99||Rh（以下同様）

8　Lezra, Jacques, *Icarus reading: trope, trauma, and event in Shakespeare, Cervantes, and Descartes,* (1990). 902||L59||Ic

独白は，父の敵討を決行すべきかどうかで悩む文脈の中で，撃って出て運命と刺し違えるのはいいにしても，ふと死を想うとためらうとして，死への恐れを語り，あの世への旅人は二度と戻って来ないといった告白が続く。

これはほぼ同時期に『随想録』を残したモンテーニュの「穏かな懐疑主義」に似ているといわれ，いわゆる通説もそれを支持する。

ではベーコンはどうだろうか。ベーコンにも「死について」と題するエッセイがある。その書き出しを少し引用してみよう。

人は死を恐れる，子供が暗がりを恐れるように。子供のそうした自然な恐れが物語を聞かされることで助長されるように，人々の死への恐れも助長される。確かに死を罪の報いとし，あの世へ行く過程とし，死について黙考することは尊く宗教的である。しかし自然への貢ぎ物としての死への恐れは人を弱くさせる。さらに宗教的な黙考では，しばしば虚栄と迷信の入り混じりがある。

「科学者」ベーコンらしい，現代人も説得できる正確な文章である。あたかもハムレットの独白を，独自な正確さで評価し，評論したものとも見える。さらに以下のくだりがある。

復讐は死に勝利し，愛は死をものともせず，名誉は死にあこがれ，悲しみは死につきまとい，恐れは死を満たし，オットー皇帝が自殺して以来，同情（感情の中でももっともやさしいもの）は，ただ元首への共感から真の追従者として沢山の殉死を生む。

このエッセイの最後は「死は良き名声への扉を開き，嫉妬を消滅させる」ということである。私はそこに命を賭けて勢力ある人々がせめぎあい，その中の一人の死が一定の政治的効果を生む政治の現場にいたベーコンの立場も読み取れると思う。外交を含む争いごとに心をくだく哲学者の思いもそこにある。

さて以上を踏まえてハムレットの独白に近いのはモンテーニュかベーコンかという問題を考えれば，具体的な「文言」については，モンテーニュの『随想録』とハムレットの独白で，はっきりした対応点を見つけるのは難しいのではなかろうか。概括的な類似の指摘ではない具体的な「文言」の類似を指摘した研究を寡聞にして私は知らない。通説は全体の調子を見て類似点を指摘するというより論じるのだ。ここで見てきたように，ベーコンのエッセイの方が遥かに多く具体的ではっきりした「文言」の類似を指摘できるし，他の作品との関連も論じ易い。しかし，根本的な一点が違うと私は思う。

つまり，ハムレットの独白は，キリスト教を信じようとしてなお死後の世界について懐疑を

払拭出来ない姿勢がある。それはモンテーニュに似た，一種「おずおずした態度」なのだ。ベーコンのような「宗教的な黙考では，しばしば虚栄と迷信の入り混じりがある」として憚らない態度ではない。ましてや死について十分考察した上で「死への恐れは人を弱くさせる」と断じる態度ではない。「死への恐れが我々を臆病者にする」とは，まさに問題の独白中のハムレットの文句で，シェイクスピア=ベーコン説の「証拠」とも見えるものなのだが，ハムレットが信仰と懐疑に揺れ動く「おずおずした態度」で言うのと，ベーコンが「科学者」として「断定する」のとでは，印象がまるで違う。

信仰と懐疑に揺れ動く「おずおずした態度」は，「英文学」のひとつの立場として登録され，同じ「文学」としても読める参考資料としてモンテーニュの『随想録』が注記される。それに対しベーコンが「科学者」として「断定する」，死を恐れる人間心理，死の政治的効果の分析と，死を恐れる心理を克服するための提言などは「近代哲学」に分類され，別系統とする。こうした「英文学」「英国の近代哲学」という専門領域区分に安住できるならシェイクスピア＝ベーコン説は一顧の必要もなくなる。

しかし「専門領域分類」を離れ，単に資料分析の立場でながめれば，『ハムレット』の作者シェイクスピアと「エッセイ」の作者ベーコンという，死についての考察で類似する「文言」の多い同じ国の劇作家と哲学者との関係を希薄とみなし，類似する「文言」があるわけでもないし言語も違う異国の思想家モンテーニュとシェイクスピアとの関係を重視するのはおかしいと感じる。

この問題は「文学」という「専門領域」の抱える問題を浮き彫りにする。それはシェイクスピア作品の登場人物を臨床心理学の「患者」にしてしまう以下の米国シェイクスピア研究博士論文にも現れている。

「中年以後の欝」という観点からの論考[9]は臨床心理学の応用である。影の領域へ入る完璧を求めたアンジェロ，おとなになることを拒絶するトロイラス，原始的魂アニマの女性ヘレナ（終わりよければ...）欠陥両親を持つ落胆（ハムレット）といった規定を行い，ユング的人生の不幸を克服する視点でのシェイクスピア論[10]がある。ユングは西ヨーロッパの文化的伝統に深く関るものの，臨床心理学の実践でユング派の活躍を想起させる点がアメリカの文化的ボーダーレス社会の特徴を示す。また主人公の自己客観化に寄与する良きカウンセラーを辿り，ハムレットにホレイショ，リアにケント，また『アントニーとクレオパトラ』のエノババス，『コリオレイナス』のメネニウスなどを分析するもの[11]は，実践的な臨床心理カウンセリングが

9　Feak, Marcus David, *Aspects of Kleinian Life Span Psychology,* (1995). MF||189||7

10　Porterfield, Sally F., *Inner players: a Jungian reading of Shakespeare's problem plays,* (1992). 932||Sh||Po

11　Datta, Pradip Kumar, *The role of the good counselor in selected Shakespearean Tragedies,* (1991). 930.28||Sh||Dat

盛んな米国の実状を反映している。

ただ，米国の実情がどうであれ「文学」がそれで成立するのかという疑問が生じる。シェイクスピア作品を「臨床心理学症例集」に変えてしまう試みが，果たして「文学研究」なのかという疑問はつきまとう。この疑問のひとつの回答として，シェイクスピア作品に描かれた「民衆の革命的なエネルギー」を，臨床心理学を手段として浮き彫りにしているのが米国シェイクスピア研究博士論文だという考え方ができる。

幼児が母親からミルクを与えられるときに，願望の実現と思ったり，実現せずにベビーベッドを蹴飛ばす代償行為に及んだりすることを幼時体験として論を展開するフロイトの分析をもとにして，思考が現実化すると信じる魔力的思考を分析し，『マクベス』などに適用する論考[12]もある。そこで浮き彫りになるのは現実を変えたいと願う「民衆の革命的なエネルギー」であり，それを個人の視点で表現すれば「アメリカの夢」実現願望である。

ユング派の臨床心理学でなくとも，イコン，エンブレムなど，イメージャリーに関わる考察があったり，宗教について考察し，聖俗の感覚のあるものは，すべて，極めて広義な意味で「心理学」と関わるのがアメリカの特徴ではなかろうか。そのこととシェイクスピア作品に内包する「民衆の革命的なエネルギー」との呼応関係は，「心理学」の持つ革命性を説明すれば明らかになる。

西欧を「支配する側の文化」として君臨したのは「ヘブライ・ヘレニズム文化」である。平たく言えばキリスト教とギリシャ・ローマの古典文化なのだ。そこに資金面からも権力との親交を必要とする科学技術がすり寄ってゆくにしても，「文化の内容」については，明らかに衝突し，革命を起こす面があったことを否定できない。またイギリスの庶民には「ヘブライ・ヘレニズム文化」では捉えきれない，人間臭く，エネルギーに満ちた文化がある。

ベーコン自身，父が大法官である家に生まれ，アリストテレス哲学などを教育され，それに対する反発があったといわれる。そこから独自の自然哲学を切り開いていった。

こう考えると，「支配する側の文化」に対抗し，革命を起こす方向にあると，ベーコン哲学を見なせる。学問の中の革命と，ロンドン市民など民衆と手を結ぶ革命的傾向である。

この「革命的傾向」を追及すれば心理学的分析とシェイクスピア＝ベーコン説の関わりのある面をつかむことができる。そこで，しばらくこの「革命的傾向」について考察したい。

同じ「革命的傾向」といっても二つの傾向がある。一つは権力の締め付けに対し，武器を取って戦うか否かで逡巡し，個人を解放したい欲求と，権力が押し付ける拘束との間で板挟みになって狂気に至ることを，舞台藝術として「美」とともに表現する行き方である。他方で，あっさり武器を取って戦うことにして，反乱を起こし，勝利するか否かを力強く表現する行き方があ

12　Favila, M. C., *Magical thinking in Shakespeare's tragedies,* (1995). MF||189||52

る。「美と狂気」か「民衆のエネルギー」か，と言い換えてもよい。

シェイクスピア作品は後者の革命的傾向だけで出来ているわけではない。ハムレットが狂気と言われ，近代人として悩み逡巡する。そのハムレットが恋人のオフィーリアを「尼寺へ行け」と傷つけ，オフィーリアは水死し，その花に囲まれ水面によこたわる姿がエバレット・ミレーの絵画になって後世の人々の記憶に残る。

これは「民衆のエネルギーが起こす革命的傾向」だけでは説明がつかない。ハムレットは民衆のリーダーとしての革命者とみなせないことはない。しかしオフィーリアはそうはいかない。「美と狂気」の世界である。『マクベス』の魔女や歴史劇の血みどろの争いの果ての人間像など，「美というより異形」を描く民衆的なエネルギーはシェイクスピア劇にも他方では存在する。『ヘンリー六世』三部作中のグロスター公爵は，無残に父を殺されたがゆえに人間性と距離をおく，ルネッサンスとして新しいタイプの悪党だとする論考[13]も，シェイクスピアを臨床心理分析で映画的に蘇らせた趣きがある。一応映画を大衆藝術とみなせば，「民衆のエネルギーが起こす革命的傾向」になる。

心理分析含みの映画の問題は，しかし「狂気の大衆化」という要素をはらんでいる。これについては改めて論じるとして，これまで旧世界の国家秩序に属する感覚が西欧の「文学研究」として専門領域を構えていたのは，「ヘブライ・ヘレニズム文化」基調の「支配する側の文化」傾向であったことは否めない。「民衆の革命的傾向」を他者として受容しても，イギリスでいえば基調は中流階級の伝統的嗜好なのだ。「美と狂気」を尊重しても「異形と革命的動乱」はもう一つ得意としない。

「心理学」が革命的なのは「ヘブライ・ヘレニズム文化」を基調として評価基準を設定する旧世界的「文学研究」に対し，評価基準を崩壊させ，あらゆる宗教的道徳的考察を相対化する作用があるからである。その例を米国シェイクスピア研究博士論文で挙げてみよう。

最終章で12世紀フランスのキリストが踊るイコンとエンブレムを掲げ，ユーモア，楽しさに神意が現れることを提示し，禅など，キリスト教以外にも例があることをいう論文[14]がある。聖なる道化の概念をシェイクスピアに導入し，道徳劇からの発展を道化論に適用する。フェステからリア王付きの道化への発展で，狂気を制御する道化を指摘し，ハムレット，ハル王子などの道化性も，聖俗のバランスをとる者との立場で解析する。「祝祭喜劇」論と道徳劇，エンブレム論の結合した論考といえる。

貧乏人が犯罪や疫病の巣として嫌われたり，同時に労働力源として尊重されたりする社会情

---

13 Evans, Christopher W., *Determined to Prove a Villain: A Reexamination of Shakespeare's Duke of Gloucester,* (1995). MF||189||14

14 Pyle, Sandra Jean, *Holy Madness: The Ministry of Shakespeare's Fools,* (1996). MF||194||12

勢の変化に対応して，文学でも貧乏を悪とするものや徳とするものが現れる。1600年前後のイギリスについてこうした観点での考察を行ない，金持ちの境遇が変わって初めて知る貧乏を分析することを主題とする『リア王』のような作品が生まれる傾向は長続きせず，すぐステレオタイプの貧乏人を描く物語りが登場するとするもの[15]は，貧乏という観点で西欧にこだわっている。西欧へのこだわりは西欧的思考のシステムへのこだわりと紙一重で，広義の心理学的論考ともいえる。

この「貧乏に徳があるか」といった発想はベーコンが「逆境について」というエッセイで「金持ちの徳は穏やかさ，逆境の徳は堅忍不抜」と書いたことそのものである。これとシェイクスピアの「情熱の奴隷でないような人間がいたら連れて来い」（『ハムレット』三幕二場）を比較すれば，「人生がままならぬ庶民」シェイクスピアと「国家を担うエリート」ベーコンとの差を感じる。衣食足って礼節を知り，ある程度経済的に豊かになって穏やかさを知り，国家を論じられる。シェイクスピアのように没落商人の息子でロンドンに出てきた青年は，同時に「情熱の奴隷」にならざるを得ない心情を知っている。穏やかさを知り，国家を論じられるには，シェイクスピアのような演劇成金でもまだ駄目で，「共同体の締め付け」そのものを何とか出来るベーコンのような立場が必要ではなかろうか。そして「共同体の締め付け」そのものを何とかした新世界アメリカの博士論文は，この意味でもベーコンの子孫だと思う。

ただし，シェイクスピア本人が「情熱の奴隷」であったかは疑問な点がある。アン・ハザウェイと「出来ちゃった結婚」した頃まではそうかもしれない。しかし，その後二人の関係には死ぬまで「情熱の奴隷」的な側面は見られない。シェイクスピア本人は「愛について」もベーコンと同じ考え方で，ただ大衆に受ける台詞としてのみ「情熱の奴隷でないような人間がいたら連れて来い」と書いたのだろうか。あるいは自らの生い立ちから「若気の過ち」として反省をこめた劇作をしたものの，虚構と実人生は別という態度であったのかもしれない。虚構と実人生を峻別し，明らかに他者である哲学者ベーコンを利用できる文学の才能の持ち主がシェイクスピアであった。

米国シェイクスピア研究博士論文には，シェイクスピア，ジョンソン，ミドルトンばかりか，アフラ・ベンまで加え，１７世紀英国の資本主義が封建体制を崩壊させていくことを，レヴィ・ストロースの文化人類学的視点や，各種の社会学，社会哲学，心理学的視点で考察した論文[16]がある。

プラトンからロラン・バルトまでの肉体論を展開する中で，『尺には尺を』など，シェイク

15　Pories, Kathleen Gail, *Fashioning the Face of Poverty in Early Modern England,* (1995). MF‖189‖44

16 Roh, Seung-Hee, *Determinate Contradictions in Seventeenth-Century Drama: Inheritance, Gender, and Exchange in Shakespeare, Jonson, Middleton, and Behn,* (1995). MF‖189‖72

スピアの作品もとりあげる論文[17]がある。

これらはすべて「ヘブライ・ヘレニズム文化」基調の価値基準を崩壊させる。アリストテレス的な「徳の基準」に対抗するようにベーコンの「金持ちの徳は穏やかさ，逆境の徳は堅忍不抜」がある。それにまた反論するように「情熱の奴隷でないような人間がいたら連れて来い」というハムレットの台詞がある。それはシェイクスピアの本音なのか本音とは別の虚構なのか，定かでない。そのことは次項の「ワークショップ（創造工房）」と関わっている。

その前に，この項を短くまとめれば心理学的分析は旧世界的価値観を崩壊させる作用があり，ヘブライ・ヘレニズム文化に反発して近代自然科学を創始したベーコンには対応しても，旧世界的価値観と格闘して狂気に至るハムレット像を描いたシェイクスピアとは，少しずれた面がある。フロイトがシェイクスピア作品から臨床心理学を組み立てたとしても，それはシェイクスピア作品の「ベーコン部分」（ベーコンの問題意識に対応する部分）にのみ反応したことかもしれない。心理学的分析が盛んなアメリカは，シェイクスピア作品に，旧世界より強くベーコンの影を見ている，といったことになる。

(b) 枠にとらわれない米国流自由研究

机上の「文学」とは別に，「ワークショップ（仕事場の意味から演劇では準備段階での様々な活動，講習会をさす）の創造性」といったものが存在する。アメリカは国としてこの考え方を支持する。

シェイクスピア自身もワークショップと関係が深い。これについては，すぐ後で説明する。ベーコンも「科学実験室」という名のワークショップと関係していた。この二人のワークショップの質の違いを考察することはシェイクスピア＝ベーコン説検証に役立つ。

まず「ワークショップの創造性」の具体例を見てみよう。ロンドンとニューヨークで上演したミュージカル「ライオン・キング」の演出ではインドネシアの影絵を取り入れ，演出家ジュリー・テイモアが評判になった。彼女がシェイクスピア劇を初めて映画化した『タイタス』の冒頭はおもちゃの兵隊を迫力ある画像にしたようだ。彼女の創造の秘密は「アメリカの仕事場」にある。おもちゃから大工道具までをひっくり返したような仕事場環境――ワークショップでアメリカ的創造性は生まれ，彼女の才能はそうした環境の申し子だと思う。インドネシアの影絵発掘はワークショップを屋外に押し広げたフィールドワークという活動から生まれた。その傾向は米国シェイクスピア研究博士論文にも反映する。

---

17 Liberta, Angelo M., *In the Name of the Body: The Body in Discourse from Plato to Barthes and Beyond,* (1996)MF‖194‖7

1590年代に歴史的文学的哲学的現象としてセネカ的伝統が確立したとし(p.24)，セネカ的オーヴィッド的ヴァージル的聖書的インターテキストが復讐悲劇の象徴的枠になり(p.118)，「彼女は女だ，ゆえに求愛せられるべき・・・」といった引用をしてセックスと暴力について論じる(p.119)もの[18]がある。西ヨーロッパ文化の伝統があることは確実ながら，そこからさらにセックスと暴力が荒れ狂う米国自身を照射し，このジュリー・テイモアが監督し，パートナーのエリオット・ゴールデンサルが音楽を担当した映画『タイタス』(1999)の解釈根拠にしてもいいような論文という意味で，移民を受け入れ，自由の国としてのクリエイティヴ重視の伝統に分類できる。

こうしたことからも伺われることながらワークショップの本質を一言で言えば「統一的な権威がない場での創造」ということだと思う。このことを逐次指摘してゆきたい。

さてベーコンのワークショップについては当時の「学者と職人との結合の運動」が重要である。これに携わった人物にエリザベス女王の侍医ギルバートがいて，ギルバートは地球が磁石であることを，女王の前で実験して証明してみせたりしたと紹介する科学史[19]の書物がある。その後で次の記述になる。

「人間の知識と力とは合一する」（「知は力なり」）というＦ．ベーコンの言葉もまた，当時ロンドンで進行していた学者と職人との結合の運動を哲学的にいい表わしたものであった。

これは「実験諸科学の成立」と題した第４章３項の「フランシス・ベーコンと実験」という第３小項目の書き出しの一文である。「知は力なり」くらい有名なベーコンの言葉はない。しかし，それがアリストテレスの「最高善」のような「統一的な権威」がある知識とは異なることは，あまり意識されていない。ベーコンはアリストテレスを批判し職人と結ぶ。職人と結べるということは「統一的な権威」がない場で，わいわいがやがや試行錯誤を繰り返して真理に達しようとする，まさにワークショップ的な知のあり方を示している。

つまり後に近代哲学の祖として権威付けられても，意外なことにベーコン自身も「実験」重視の人であり，その意味で「現場感覚」を持った哲学者であった。では，ここで言う「学者と職人との結合の運動」とは何だろうか。

同書によると，エリザベス女王，ジェームズ一世の時代（つまりシェイクスピアが活躍した時代）は「マニュファクチャア的工業生産が始まり，これに呼応して世界貿易の中心がイギリスへと移った時代」[20] であって，「スコラ論議にあけくれるオックスフォード，ケンブリッジ大

18　Sutherland, Jean Murray, *Shakespeare and Seneca: a symbolic language for tragedy,* (1985). 930.28||Sh||Sut

19 山崎俊男他編纂,『科学技術史概論』,（オーム社,1978).

20　Ibid.p.64.

学に飽きたらぬ市民が学者の知識と職人や船乗りの諸経験とを結びつける運動を起こした」という。「その中心がロンドンのグレシャム大学（カレッジ）」で「たとえば天文学の教授は船乗りに航海器具の使い方を実物で教え」たりして，「ここから自然の探求方法として実験的方法が生れたのである」とする。

次にシェイクスピアとワークショップの関係を論じたい。台詞まわしの言葉の才能が紛れもなくシェイクスピアのものだということとの辻褄を合わせるため，ルーベンス工房ならぬシェイクスピア工房なるものを提唱し，全体の作成は弟子がやって，台詞をちりばめることだけシェイクスピアがやったといった極めて高名な演劇評論家がいた。その『お気に召すまま』の構成がフランス演劇に親しんだ感覚から見てあまりに杜撰だという趣旨である。ここで浮き彫りになるのはワークショップと権威の関係である。全く統一的な権威がなくなれば，せっかくの集団的な努力が無駄になる可能性がある。演劇という「ワークショップ」は権威と無関係では決してない。

絵画と違って当時の演劇は劇団監修の台本も出版され，大家には全集の出版もあった。出版登録制度もあれば，「著者」の概念（現在ほど著作権がやかましくはなかったにせよ）もあった。「オーサー」の権威を示すシェイクスピア自身の句もある。コリオレイナスが母や妻の請願をはねつけようと「本能に従うほど青二才じゃないぞ。男は男の著者自身で他の人種は知らないという程に耐えてみせる」(I'll never / Be such a gosling to obey instinct, but stand, / As if a man were author of himself / And knew no other kin.)（『コリオレイナス』五幕三場）と言う。シェイクスピア作品では人格が本に喩えられる。その本の著者がさらに権威を持つわけである。

劇評ジャーナリズムで論争さえあった。ルーベンス工房のようなシェイクスピア工房があって共同制作で演劇を作ったとは思えないものの，シェイクスピアが次に述べるような意味で「現場の人」であったことは確かだ。

考古学では中央の大学を出て独自の理論を持った研究者ばかりではなく，発掘の助手を長くやった人の中からすぐれた研究が出て，その人が著名な考古学者になることもある。科学技術探求の場でも中央の大学を出た者だけがすぐれた研究をするわけではない。技官や助手といった現場に密着した存在から叩き上げてすぐれた研究をすることも多い。だからといって，あらゆる権威が否定されるわけではない。

ときに現場の発見が歴史を書き換えることもある。その魅力に取り付かれたのが，あのインチキ考古学者であった。「神の手」を持つといわれた「権威者」であった。それはともかく本当に現場の人が歴史を動かした例の最たるものはウィリアム・シェイクスピアであったといえるかもしれない。特別な学問の研鑽もなく，特別な生まれがあるわけでもないのに歴史を動かすことが出来るとなれば，成功者に対するやっかみも強い。シェイクスピア＝ベーコン説が絶

えない理由には，それもある。

同じ現場が歴史を動かすにせよ，ベーコンほどの学識がある人物なら許せても，無学かもしれないウィリアム・シェイクスピアでは我慢がならないという大衆心理がある。けれど，そうした嫉妬が絡むこととは別に，シェイクスピアの演劇とベーコンの科学実験室ではワークショップの質が違う。

ベーコンにはじまる近代哲学は自然哲学としてニュートンを経て科学技術探究の学問になり，その方法論が確立した。現場の発見は厳密な方法で検証され大発見なら歴史を動かす。その方式にまず狂いはない。そこに学歴差別（欧米では博士号を必須とする資格審査はあるにせよ）はない。ゆえに，学歴などの階層秩序に対する現場による革命は継続する。博士号さえあれば，誰もが世紀の発見に挑める自由競争社会なのだ。

同じことがシェイクスピアについても言える。基本的にはオックスフォードかケンブリッジかの大学を出た才人が机上で執筆した台本を劇団が買い切って興行に持ち込むのが常であった。しかしシェイクスピアだけは劇団側の人間として常に現場にいて，現場感覚で台本を作成していたことは確かである。『お気に召すまま』などはイヴェントとしてのレスリング，放逐された公爵とその家来たちが森の中で車座になって歌う歌など，場面展開の興行的アトラクションがあって，複数のカップルが成立する祝婚の大団円への盛り上げを主眼に構成されたものである。その過程で肝腎のヒーローの存在が希薄になるなど，通例の演劇構成では考えられないことが起きている。

『お気に召すまま』は『十二夜』と並ぶシェイクスピアの初期の喜劇の傑作で，作者の目が隅々まで届いていないということはありえない。しかし，『タイタス・アンドロニカス』について，この作品は成立自体「現場に振り回されて成立した」可能性がある。第一幕だけピールの「文体」であることが証明された。第一幕の「文体」が違うという議論が従来からあった。構造上は第一幕もその他の部分も整合するのに，第一幕だけ「文体」がシェイクスピアの先輩作家であるジョージ・ピールの作品のようだというのである。このことは，英語を母語とするシェイクスピア研究者たちの感覚だけではなく，コンピュータで裏付けられる（この点については後述する）点もあった。『お気に召すまま』は，「振り回された」かどうかはともかく，「現場から生れた作品」であることは先述の通りである。

同時にこのことはコンピュータという道具が「ワークショップ」の本質と関わることを示す。コンピュータを使った研究は書物のような目的，方法論，著者の権威とは無縁のところで研究が出来る。シェイクスピア時代のト書きを全部調べた結果第一幕だけピールの「文体」であることが証明された。コンピュータソフトでト書きばかり調べるというのは研究者の直観以外の何物でもなく，全く自由な「ワークショップ」的発想と言える。

また『タイタス・アンドロニカス』は，主人公の悩みを現す台詞に「私は海だ」（I am the

sea）（三幕一場）というのがあって，それは独特の発展をする。つまりのっぴきならぬ悩みの表現として「海」があることである。

以下は全体として『タイタス・アンドロニカス』がシェイクスピアのものであることが間違いないことを示すと同時に，この作品でヒーローが悩むとき「海」を口にすれば効果があったことに味をしめて，シェイクスピアが何度もその手を使うという，例えて言えば漫才の即興芸での「おはこのネタ」のような感覚があることも示してくれる。

ハムレットの「生か死か（このままでいるか，いないか），それが問題だ」で始まる有名な独白の「武器をとって海のような災厄と戦うか」（take arms against a sea of troubles）という表現や，『リア王』中の台詞「熊を避けて逃げたら猛り狂う海があれば，まだ熊に食われるのがましかもしれぬ」(Thou'ldst shun a bear; / But if thy flight lay toward the raging sea, / Thou'ldst meet the bear i' the mouth.)(三幕三場)への発展ということである。

ベーコンのエッセイに海が出てくると，それは戦略と結びつく。アントニーが敗北したアクチュウムの海戦が語られ，アメリカは海の向こうで発見されたことであり，国家を論じ，戦略を語るときに海が登場する。イギリスが海洋立国であり，国家としての行く末は海にあった。

「あいつらを俺の東と西のインド会社にして両方を取引する」（they shall be my East and West / Indies, and I will trade to them both）(『ウィンザーの陽気な女房たち』一幕三場)というのは二人の女性を手玉にとるつもりのフォールスタッフの台詞である。シェイクスピアもベーコンと同じく海洋立国イギリスの国際政治経済が頭にあったことは確かだ。しかし，その関心は愛欲である。

「政治経済の人」ベーコンと，「愛欲と文学の人」シェイクスピアがワークショップという「統一的な権威がないことによる解放感」とどう関わるかが問題なのだ。

シェイクスピアと同時代の「大学出の才人」と呼ばれた作家たちとの違いもそこにある。つまり作者と現場との距離が問題なのだ。大学出の才人の場合は，その「文学」への個人としての態度が現場と関わりなく確立していて，最終的に興行段階で現場との調整が必要になり妥協することもあるかもしれない。しかし，あくまで現場から独立した別個の存在である。ということは現場という「統一的な権威がないことによる解放感」とは遠く，イギリスという国家を支配する「統一的な権威」であるヘブライ・ヘレニズム文化と一人書斎で向き合いながらの作業ということになる。

こうした現場と個人の問題は演劇だけでなく考古学や科学技術探求の場でも起るし，別の「文学」の現場についても起る。

演劇をやるのに資格は要らない。一見自由競争社会に見えて，不思議なことに，その成果が演劇ワークショップを拘束する面がある。たとえばハムレットがつとまる名シェイクスピア役

者として，ギルグッドやオリビエの名が浮かぶ。溯れば十九世紀のアーヴィング，十八世紀のギャリック，シェイクスピアと同時代のバーベッジもシェイクスピア演劇の伝統に連なる。ただし，シェイクスピア時代にはケンプやアーミンといった喜劇役者は尊重され，当時の評価では，尊重というより尊敬に近いほどであったとも推定される。ハムレットと並んで，フォールスタッフがつとまる役者も尊重される。二十世紀でもシェイクスピアを離れると，チャップリンやローワン・アトキンソン（ミスター・ビーン役で一世を風靡）は後世に名を残すであろう。その尊重され具合は，喜劇役者尊重のアングロ・サクソン的伝統をまざまざと見せる。

これらの名優たちが世に出る当初の環境は，それぞれ現場の人が資格の要らないワークショップで努力し，やがて一世を風靡する自由競争社会であり，現場による革命であったかもしれない。けれどそれが名優として伝統を成すとき，それを継続した革命と呼べるだろうか。この点がシェイクスピアとベーコンのワークショップの違いである。

イギリス中流階級の「ヘブライ・ヘレニズム文化」による支配があって，「文化の内容」については，明らかに衝突し，革命を起こす面がベーコンの「近代哲学」にあったことを否定できないと先述した。またイギリスの庶民には「ヘブライ・ヘレニズム文化」では捉えきれない，人間臭く，エネルギーに満ちた文化があるとも述べた。

ベーコンの「近代哲学」はニュートンを経て科学技術革命を起こし続ける。技術革新によってアメリカは発展を続ける。一方，演劇のワークショップは，そうした事柄とは微妙に違って，常に変わらぬ「ヘブライ・ヘレニズム文化」と，人間臭く，エネルギーに満ちた文化を足し合わせたアングロ・サクソン文化の伝統に吸収されてしまう面がある。演劇ワークショップは，革命の継続というより，伝統が伝統を維持するためのリクルート・システムに過ぎないかもしれないのだ。

ベーコンは，あくまで「ヘブライ・ヘレニズム文化」圧力への反抗，革命として独自の美意識を打ち出した。科学技術開発と深く結びついたベーコンの美意識は，むしろずっと後のアメリカの藝術に近いものかもしれないと思う。

これに対し，演劇人であるシェイクスピアは「美」や「愛」に興味があった。ベーコンもこれらに興味があっても「美」や「愛」に「狂うほど」の関心ではなかった。シェイクスピアは美少年を女性役として舞台に登場させ，微妙な心理状況を表現させ，ときに「狂うほどの美」を実現して喝采を浴びようとする。どんな形にしろ「美」が一つの秩序感覚である以上，シェイクスピア時代の初期には「革命的」であったかもしれない美意識が，伝統の積み上げによって，一つの「拘束」になるのは仕方がない。また当初から観客にも美しいと感じるものを舞台上に実現するには，どうしてもその時代の美意識のルールを踏襲しないではいられない保守性がある。

以上を踏まえて米国シェイクスピア研究博士論文をながめると，「アメリカのワークショッ

プから生まれた」と感じさせられる研究論文は多い。その中でベーコンのワークショップから派生したとして見れば頷けても，シェイクスピアのワークショップの延長としては首を傾げざるを得ないものも多い。

Gallows humor をシェイクスピアの作品について追及する，文字どおり処刑について考察するものがある。赦しも含め政治的というより宗教的な面もある論考[21]である。カトリックのイメージがあるかないかも論じるので，チャールズ一世処刑を強く連想させられる。枠にとらわれない考察がボーダーレスのアメリカの特徴を表す。ただし，シェイクスピアの演劇から処刑ばかりを集めるのは演劇構造の解体である。むしろ大法官ベーコンのエッセイなら処刑に関心を集中することもあり得るし，事実処刑を前面に出さずとも「裁判官の職権について」というベーコンのエッセイはこれに当たると思う。

ベーコンのこのエッセイではカトリックへの強い反感が示される。「裁判官たるもの，ローマ・カトリック教会が勝手に聖書をねじまげるように法をねじまげてはならない」といった調子でエッセイは始まる。西欧全体へのカトリックの精神的支配からイギリスが脱しようとする心意気が感じられる。ただし，ヨーロッパ大陸のシステムが厳密に体系だった法であることに比べ，英米法の慣習法や経験論的解釈が複雑に入り組む有様はまた独特のものであって，必ずしもベーコンの言い方が正しいとも言い切れない。「裁判官たるもの，イギリス人が勝手に法をねじまげるようにねじまげず，聖書と同じ価値を持つカトリック教会の神学のように厳密で体系だった法解釈を行わねばならない」と大陸の同時代の法曹界の誰かなら反論したかもしれない。問題はカトリックが支配した大陸とイギリスとどちらが正しいかではなく，強力な権威にすがるのか，権威から脱しようとするのかということだと思う。

イギリスは「馬の地獄，召使の牢獄，女性の天国」と言われる傭兵の祖国であった。法体系を弄ぶ「貴族・僧侶の天国」ではなかった。このことは「(g) ホモセクシュアルに関わるもの」の項で詳述するとして，「馬の地獄」について言えば馬術の観点でシェイクスピア作品解析するもの[22]も，それだけなら英国の伝統研究になる。しかし，その背景にカウボーイ文化の視点があることを考えると，むしろ枠にとらわれない米国的考察の領域になる。ただしカウボーイとシェイクスピアを結びつけることは，少なくとも英国中流階級の文化の視点からは疑問を感じないではいられない。そこに反逆しアメリカを夢見たベーコンならまだしも頷ける。

つまりアングロサクソン民族はシェイクスピア時代頃から「海に乗り出す荒くれ男」のワークショップを，全世界相手に繰り広げたといえばいいかもしれない。「海に乗り出す」方向は，やがて西部開拓のフロンティア・スピリットになり，シェイクスピア作品の背景にある，ベー

---

21 Spencer, Janet Marie, *The politics of mixed-genre drama : the comic treatment of punishment spectacles in Shakespeare,* (1990). 930.28||Sh||Spen

22 Nelson, Barbara (Barney), *Shakespeare's use of horsemanship language,* (1991). 930.28||Sh||Nel

コンによる「密かな文化革命」の精神を受け継ぐともいえる。

しかし，同じく東西インド会社による貿易で儲けようとする欲望とフォールスタッフの愛欲を重ね合わせるシェイクスピアの「海」と，カウボーイの開拓精神は，直接は結びつかない。以下に挙げる「アメリカ流自由研究」のような論文は，英国中流階級の文化を様々な視点から解体するもので，英国本国のシェイクスピア的伝統に反逆し，ベーコンによる「密かな文化革命」の伝統になら合致しないでもないといったものである。

モラル，罪，性などに関わるエンブレムをロマンス劇から集めて論考するもの[23]がある。ロマンス劇をエンブレムで読み解くのは西ヨーロッパの伝統にたつものながら，モラル，罪，性などに関わるものを集める点に米国流自由研究の趣きがある。ハムレットの内面の問題（オエディップス・コンプレックス，ディレイなど）を，どこか犯罪心理学のように考察するもの[24]も同様である。

この人間の内面と外面の問題がアメリカでは深刻な問題になる。たとえ旧世界の住人でも，モラル，罪，性などに関わるとき，人間の内面と外面の関係について考察せざるを得ない。けれど，旧世界の場合は，西欧であれば教会と国家がある程度の道筋をつける。国家が主として人間の外面的な部分を規定し，教会が内面を指導する。アメリカはまず旧世界の西欧国家群の支配を逃れて新天地を開拓し，「アメリカ」という国家は，必ずしも人間の外面を規制することを目的としたものではない。また，キリスト教ということでは西欧旧世界もアメリカもほぼ同じ信仰を持つ。しかし，内面をローマ・カトリックが千年以上支配した結果のような強い規制力がアメリカでも働くであろうか。

神の遍在はカトリックが古来説くところで西欧人は幼少より叩き込まれる考え方だ。しかし，人間の内面にも外面にも存在する神と，そうした神への祈りは，実際に悩みをかかえる個人の救済について考えると西欧旧世界とアメリカでは違った様相になる。

食物で作品を解析し，タイモンは拒食症であるとし，『冬物語』の人間関係を『ソネット集』の食物の比喩で表された支配構造のように解析し，ヘンリー四世をめぐる父子関係も『じゃじゃ馬馴らし』も食物と支配関係で読み解けるとする論考[25]は実践的な臨床心理学か心身症治療と文学論の結合になる。

つまりアメリカのシェイクスピア研究は，心身症治療といった現代人の悩みを直接シェイクスピアにぶつける傾向がある。これを一笑に付すことは旧世界の住人がすることである。アメ

23　Cho, Kwang Soon, *A study of emblems in Shakespeare's last plays,* (1990). 932||Sh||Cho

24　Russell, John Joseph, *Hamlet and Narcissus : on the relevance of contemporary psychoanalytic theory to Shakespearean tragedy,* (1991). 932||Sh||Ha=Rus

25　Janes, Nanette Hazel, *Nurturing Process and the Creation and Stabilization of Self in Selected Workes of Shakespeare,* (1995). MF||189||34

リカ人の心の悩み解決方法として様々に論じられる。それをまとめれば（1）祈り（2）自分との和解（3）内面と外面のつながりを意識することではなかろうか。

葬式とは限らず，死を嘆く場面をシェイクスピアの作品から集め，感情中心の分析を行う論考[26]がある。学部卒論レベルならどこの国でもありそうな研究方法ながら，それで学位が取れるところが米国ならではではなからろうか。

おそらく身近な人の死があって，その悲しみを乗り越えるためにシェイクスピア研究論文を書くということがアメリカでは認められるのだと思う。旧世界ではどれか一つに作品を絞らずに死を嘆く場面ばかり集めることは，あまり共感を呼ばないと思う。旧世界では身近な人の死を嘆く悲しみを乗り越えるために，祈るにしても，祈り方は宗派によって決まっている。嘆く自分自身との和解といっても，内面は教会の指導の下にあり，外面は国家が管理して久しい。内面と外面のつながりでいえば，確かにローマ・カトリックも英国教会も超越神を信じる。けれど，それがいつのまにかローマ教皇やカンタベリー大僧正もしくは英国王が頂点に立つ組織が支える神にすりかわることは否めない。

その組織から脱したアメリカでは神が超越神であるというより，超越するものであって初めて信仰の対象になる傾向もある。いわゆるトランセンデンタリズムである。非在存在（そこにはない虚のイメージ）をシドニー，シェイクスピア，エミリー・ディキンソンなどを材料に，読者，作者，愛しあう二人の関係を主に考察するもの[27]は屈折したトランセンデンタリズムを思わせる。

内面も外面も固定した規制がないことは，国家や教会の枠を超える思考習慣ばかりか，哲学のボーダーレス化も促す。ラカンやベーコン，ロック，アリストテレスなど交えたバロック藝術論で，ダンの詩や『嵐』もバロックで括るところに意味があると考えられる論考[28]は，人生哲学のボーダーレス化といった観を抱かせる。

これはアメリカの反映であると同時に，シェイクスピア自身，ローマ・カトリックの支配を脱し，ヘブライ・ヘレニズム文化の拘束からも自由になる精神的環境の中で，常に自分とは何かを問い続ける作品を生み出した解説になると思う。シェイクスピアは自分を問うという形で，当時の国家を問い，教会の精神的支配を問う思考をしていたともいえる。

シェイクスピアの『ソネット集』のテキストが，必ずしも著者，"Ｉ"で語られる主人公の詩人が一致したオーサーシップの概念でとらえられないことを論じることで詩論を展開する。そ

26　Kazarian, Albert I., *Shakespeare's representations of mourning in seven plays,* (1990). 930. 28|Sh||Kaz

27　Martin, Maggie, *The Transcendental Element in the Absent Presence,* (1995). MF||189||46

28　Bornhofen, Patricia Lynn, *Cosmography and Chaography: Baroque to Neobaroque A study in Poetics and Cultural Logic,* (1995). MF||189||16

れを他のルネッサンスのソネット（ペトラルカ，ドレイトンなど）にも適用する論文[29]がある。

「礼儀正しさ」を観点に，貴族であることと，紳士の概念のずれなどを歴史的に考察し，「礼儀正しさを説く文献」を手がかりに，ハル王子の成長や『十二夜』を読み解く，イギリス的自己知論や成長論を，大陸的カトリシズム背景の考察に置き換えたような議論をする論文[30]がある。『ペリクリーズ』をめぐるオーサーシップ，作品の評価など，様々な問題を，１９世紀，２０世紀に絞って著名な英文学者，批評家の意見を中心に，まとめたもの[31]がある。英国人にとって内面も外面も規制されるマナーを，マナーに規制されないアメリカ人が論評することで，個人と国家，個人と広い領域を支配する教会の関係を追及したものともいえる。

『ルクリース』『タイタス・アンドロニカス』だけでなく，シェイクスピアの詩的表現の根幹に「強姦」(レイプ)があって，「略奪愛」（ラヴィッシュメント）と女性の同意を無視し女性を家父長の財産とみなす法体系では同一視され，『オセロ』や『マクベス』（ダンカン王殺しが，まるでタルキンがルクリースを強姦したように描かれる）にまでそうした考察対象が広がるとする論考[32]がある。男性の性欲はその都度充足するのに女性の性欲は悪魔でさえ満足させられないので女性を魔女とみなす取り扱いが出てくる，といった観点から，シェイクスピアの初期のコメディを分析。祭りで終わるのは男性の性欲充足を隠しているといった鋭い指摘をする論文[33]もある。

こうした男女の性欲，特にレイプくらいアメリカ人が悩みの解決法として持ち出す「自分との和解」に密接に関わるものはない。古来西欧キリスト教が原罪として根源的な問題にしてきたことではある。けれど，ローマ・カトリックやイギリス国教会といった組織から離れ，アメリカの広大な自然の中で超越的な存在と対峙し，同時に世界を相手にテクノロジーを武器に市場経済を制し，軍事大国として君臨する国の個人の悩みとしてみれば，スケールと迫力が増す。原作以上の迫力を付与する点がアメリカのシェイクスピア研究にあるともいえる。

これらはすべてシェイクスピアの作品ではなくベーコンのエッセイと結びつけて論じた方がより説得力を持つと私には思われる。つまり着想が部分的にすぐれていても収斂する旧世界文学としての価値基準がないので悪く言えば「シェイクスピアをめぐる思いつきの羅列」になる。それならシェイクスピア的伝統という英国中流階級の基準に反逆する革命性をベーコンから得

---

29 Cusk, Sarah, *Scattered Readers, Scattered Rhymes: Authorship, Publication and the Renaissance Lyric Sequence,* (1997).MF||194||6

30 McCarney, Margaret R, *Renaissance Courtesy Theory and Development of English Drama,* (1995).MF||189||81

31 Skeele, David Bradley, *"Thwarting the Wayward Seas": A Critical and Theatrical History of Shakespeare's Pericles in the Nineteenth and Twentieth Centuries,* (1995).MF||189||83

32 Faherty, T. J., *Shakespeare's Poetics of Ravishment,* (1995).MF||189||60

33 Handelsman, Hilary, *Death and Disire/power and Eros in Shakespeare's Comedies,* (1995).MF||189||73

て，それで新たな基準を設けたらと思う。言い換えれば科学技術立国の国が文化を見る視点への収斂ということであって，その祖はベーコンなのだ。

そうしたアメリカがはっきり見える形で収斂すべき価値基準を持つとしたら，アメリカが世界に誇る藝術としての映画であり，アメリカには「映画的なヒューマニズム」という価値基準があるのかもしれない。それを考察することはシェイクスピア＝ベーコン説検証にも役立つ。つまり「シェイクスピアがベーコンを利用した」という考え方が生まれる基になる。

次項でこれを論じたい。それには稿を改めることにしたい。